

植物と人々；南アジアの園芸に関わる諸カースト巡り④

## インドの花カースト

-マハーラーシュトラ州とビハール州の  
マーリー・カーストとその人々-

大橋 正明(人間社会学部国際社会学科)

Plants and People:  
Horticulture Related Castes in South Asia No.4 –  
Flower Caste "Mali" in Maharashtra state and Bihar state

Masaaki OHASHI

### 1. 花カースト、マーリーについて

インドに関わり始めてから36年間が過ぎても、インドは分からないことだらけである。その一つが、マーリーのことだった。31年前、首都ニューデリーでヒンディー語を勉強していた時に訪ねた朝日新聞の駐在員の家で、庭仕事をしている人をそう呼んでいたのが、マーリーとは庭師と言う職業名だと思い込んだ。

しかしその後マーリーとはカーストの名前でもあり、庭仕事だけでなく、花や野菜の生産、花卉装飾や販売などに関わっていることや、マーリー・カーストの代表的な人物といえばムンバイ（旧ボンベイ）近くのプネーという町で19世紀に活躍した先駆的な社会改革運動家、ジョーティラーオ・G・フレー（その偉大な功績からマハートマー・フレーとも呼ばれている）である、と言ったことをインド人や先輩たちから教えて貰った。マーリーとは花や園芸に纏わるカーストであり、偉大な社会改革運動家を生み出す実力を持った人々なのだ。もっとも庭師をする他のカーストの人たちもマーリーと呼ば

れる<sup>1</sup>ので、マーリーとは職業名だと言っても全くの間違いではないようだ。

園芸短大と大学の統合の後、「恵泉の園芸とは何か」と言う議論が学園内で続いている。この恵泉の園芸が花卉を大切にしてきたことは、この分野を専門とする旧短大教員の数や、六本木のフラワーセンターの存在からも明らかだ。それゆえ恵泉の園芸の関係者が高い関心を持つであろう、そして私も長い間不思議に思っていた花カースト、マーリーを今回は取り上げる。

前回も述べたようにインドのカーストは決して固定したものではなく、地域や解釈によって、その名称や分類、ヒエラルキー上の位置などが大きく異なる。今回は北インドのビハール州で、人口が多く政治的にも有力な野菜カーストを扱ったが、マーリー・カーストの人口はビハール州ではごく少なく、南のデカン高原に位置するマハーラーシュトラ州や西のグジュラート州に多い<sup>2</sup>。それゆえ本論では、マハートマー・フレーの出身地でもあるマハーラーシュトラ州と、筆者が調査を重ねているビハール州のマーリー・カーストの由来や現状を、人類学者の研究書や当事者へのインタビューなどを基に記述する<sup>3</sup>。このことによって、同じ名前のカーストが地域によって、どの程度共通しているのか、あるいは異なっているかも示すことが出来た。

### 1-1. マーリーについて

ここでは、マーリー・カーストについてインドで著名な人類学者シン [Singh] の記述を元に概観する。

まずマーリーという呼び名だが、これはサンスクリット語で花輪を意味する「マーラー」に由来する [Singh:p.2151, Enthoven:p.422]。しかしバングラデシュを含めたベンガル地方などではマーラーカールと呼ばれ、それがその人の苗字の場合もある。これは恐らく花輪のマーラーに、仕事を意味するカールが接合したのであろう。マーリーの伝統的職業は、花卉の栽培とヒンドゥー寺院への花の供給である [Singh:p.2151]。

ところでこの連載で毎回のように述べているように、日本の私達が学校で習うインドのヒンドゥー教徒のカーストは、上位から僧侶のバラモン、戦士のクシャトリア、商人のバイシャ、農民・職人などのシュードラ (以上は4ヴァルナと呼ばれる。ちなみにヴァルナとは色の意味)、そしてこれら四つの枠

の下（あるいは五番目）に位置する旧不可触民<sup>4</sup>である。しかし日常的に重要なのはこのヴァルナではなく、前回の野菜カーストのコイリーやこのマーリーのように、主にその伝統的職業によって分かれ、地域ごとに呼び名やヒエラルキー上の位置が異なるジャーティーと呼ばれる数千のカーストである。全てのジャーティーは、先の4ヴァルナと旧不可触民のどれかに属し、かつ地域ごとに序列付けされている。一つの村には異なったジャーティーの人たちが住み、かつてはそれぞれの伝統的職業に従事し、それらの生産物やサービスを村内で互いに交換して暮らしていた。

ではこのマーリーは、このカースト（ヴァルナ）・ヒエラルキーでどの位置にあるのか？ 神に捧げる花担当という重要な役割の割には、マーリーのカースト序列の位置付けは低く、4ヴァルナの一番下、旧不可触民のすぐ上のシュードラに属するジャーティーの一つとされている。

このシュードラ・ヴァルナに属する多くのジャーティーの中で、マーリーは高い地位を占めている。例えば山崎が引用しているW.H.ワイザーの研究によると、ウツタルプラデーシュ州のカリンプル村で記録された12種のシュードラ内のジャーティーのうち、マーリーはそのトップである[山崎：139]。実際ガヤー県の調査でインタビューしたマーリーたちも、同様なことを述べている。

写真1:マハートマー・フレーの姿



ところでヒन्दゥー教では、4ヴァルナの上から三番目の人までは、10歳位の男子が行うヴェーダと言う聖典の学習の入門式が二度目の誕生を意味しているとして、再生族（ドヴィジャ）と呼ばれる。この式は聖紐式とも呼ばれ、これ以降は「聖なる紐」を常に肩から腰に掛けることになる。逆に言うと、4番目のシュードラや旧不可触民の人たちはヴェーダ学習を許されない一生族（エーカジャ）なので、その印の聖紐を身につけていない。

出典：[http://en.wikipedia.org/wiki/Jyotirao\\_Phule](http://en.wikipedia.org/wiki/Jyotirao_Phule)

マーリーが何故シュードラなのかを、リズレイ (Herbert Risley) 他がマーリー自身の伝説を紹介している。それによると、ある時ヒンドゥー教のクリシュナ神がマーリーに花輪を急いで作ってくれるように頼んだ。そのマーリーは他に適当な紐がなかったので自分の聖紐を外し、その紐でクリシュナ神のために花輪を作った。これを見たクリシュナは、そんなに簡単に聖紐を外すのかと怒り、お前達は今後シュードラに属することになると宣告した[リズレイはSingh:p.2151より孫引き、Mahoto:p.663]。つまりマーリーたちは、本来聖紐を身につけた高位カーストだったが、神への好意を誤解されたためにシュードラと言う不本意な身分になった、と言うのだ。

こうしたヒンドゥー神や争いに関連した出自や序列に関する伝説は、多くのカースト(ジャーティー)が持っており、過去にはもっと高い地位だったというものも少なくない。ちなみにシンは、マーリーのこの伝説の内容とは異なった出自に関する幾つかの学説にも言及している[Singh:p.2151]。

## 2. マハーラーシュトラ州のマーリー・カースト

### 2-1. マーリー・ジャーティーのヴァルナにおける位置

現在のマハーラーシュトラ州にあたる地域のカーストを20世紀初頭に調査したエンソーヴェンも、多くのマーリーがかつては戦士たるクシャトリア・カースト(ヴァルナ)だったと信じている、と述べている[Enthoven:p.422]。さらにエンソーヴェンは、マーリーより高位でかつては農民兼兵士だったクンビーというジャーティーから、花卉栽培を専門にするマーリーが分かれたと推定している[ibid.]。このクンビーは、クシャトリアであるマラーター・ジャーティーに関係していると主張しているので、マーリーがクシャトリアだったという主張にも繋がる。

マハーラーシュトラ州プネー市でアグリビジネスを営むマーリーのボーラワケー(Uday Borawake)<sup>5</sup>も、自分たちは聖紐を付けていないが元々クシャトリアであると主張した。しかしこの州でOBC<sup>6</sup>であることを受け入れているのは、そのほうが教育等の機会に恵まれるからという。

ところがやはりマーリーで、プネー大学大学院マハートマー・フレー研究コースの責任者であるナルケー(Hari Narke)<sup>7</sup>は、クンビー、そしてそこから

分かれたマーリーは、前稿で取り上げたビハール州の農業・野菜カーストのクルミーやコイリーと広義で同じカーストで、元々からシュードラに属するジャーティーだと指摘する。またマラーターも多くも、マーリーがクシャトリアのマラーターの一部であるという主張を否定している。

さらにナルケーは、マハーラーシュトラ州でクンビーは人口の20%ほどを占め、クンビーとマーリーが合体すると同州では圧倒的多数になり、政治的影響力が一層増大する、そのため、両者が一体であることを受け入れる政治的環境がある、と述べた。これは前稿で示した、ビハール州のコイリーとクルミーが一体というラブ・クーシュのキャンペーンと似た話だ。もっともコイリーとクリミーと異なり、この両者に通婚関係はなく、かつマーリーは女性の再婚を許すが、クンビーは許さない、という大きな違いも存在している。

## 2-2. マーリーの近代史

シンやエンソーヴェンによると、以前マーリー・ジャーティーの中にはフル(花)・マーリー、ハルディー(ターメリック)・マーリー、ジラー(クミン)・マーリー、カーチャー(綿花)・マーリーなど、栽培品種などによって区別された10以上のサブカーストがあった[Singh:p.2154, Enthoven:p.423]。これらのうちで、最初の花マーリーはこれらのサブカーストのなかで自分たちを最上位と意識しており、またここにあげた四つが最も人口の多いサブカーストであった[ibid.]。もっとも今日ではそうした区別の意識はほとんど無く、多くが野菜も花卉も果樹も作っている、しかし穀物は自給程度が多い、と実業家ボーラワケーは語っていた。

そのボーラワケーによると、現在プネー市やその周辺に住む彼の一族は、1900年頃ムンベイの北方にあるナーシク(Nashik)から移住し、当時この地域にイギリスが建設したダムによる灌漑を積極的に活用して農業を行ったので大きく発展した。一方他の主要な農業カーストであるマラーターやクンビーは、ダムの水は淀んでいるのでその水による灌漑が農作物に悪い影響を与えると考え、天水に依存する農業を続けたために、発展が遅れた。

今では想像もできない話だが、これが本当だとすると、マーリーの人々は進取の精神に富んだ勤勉な人々であることが窺われる。また花卉や野菜の

生産とそれらの大消費地である都市への供給と言う生業の都合上、マーリーは都市内外に居住することが多かった[O' Hanlon:p.105]。それゆえ、様々な社会経済上の機会に恵まれたことは容易に想像できる。こうした環境だからこそ、マハートマー・フレーを輩出したのであろう。

ちなみに農地の所有については、対立する証言がなされている。プネー大学大学院のナルケーによると、インド独立以前のマーリーの多くは小作や零細農家だったが、インド独立後の農地改革のお陰で土地を入手したと言う。逆に実業家のポーラワケーは、農地改革で土地を失ったと主張している。これは恐らく地域やマーリー内のグループによって事情が異なるのであろう。ここではこれ以上深入りはしない。

### 2-3. マーリー・カーストの代表的人物マハートマー・フレー

プネー市やムンバイ(ボンベイ)市のあるマハラーシュトラ州は、近代インドにおいて反バラモン運動やカースト問題に対する社会改革運動の著名なリーダーを何人も輩出してきた。

その中で日本でもよく知られているのは、アンベードカル<sup>8</sup>(1891~1956)であろう。旧不可触民の出身ながら、その高い能力が評価されてアメリカとイギリスに留学。帰国後は、不可触民制撤廃運動に取り組んだ。差別を生む社会の改革を優先させるべきとするアンベードカルは、イギリスからの政治的独立達成を優先するマハートマー・ガンディーらと激しく対立し、妥協を強いられたことで知られている。1956年、死の二ヶ月前に差別から決別するために、数十万の旧不可触民と一緒に仏教徒に改宗した。これは新仏教徒運動と呼ばれ、今日でもインドの仏教徒は増え続けている。またインド独立時の法務大臣として憲法を起草し、そのなかに指定カースト(旧不可触民)や指定民族に一定の割合の高等教育、公的雇用、議席等を割り当てる留保制度を盛り込んだことも大きな功績だ。

このアンベードカルに大きな影響を与えた一人が、マーリー・カーストのマハートマー・フレー<sup>9</sup>(1827~90)である。この人の人生と活動を、マハートマー・フレー資料刊行委員会[Mahatma Committee]やオーハンロン[O' Hanlon]などを参考に、簡単にスケッチしておこう。

村で没落したプレーの祖父は、マラーター同盟という国の実権を握っていたペーシュワー(宰相)が拠点を置いていたプネーの街に移り住む。プネーで祖父は花卉栽培とその販売で生活を購い、ペーシュワーの館にも儀式や祭壇のための花を納めていた。当時のペーシュワーは祖父の仕事を高く評価し、祖父にプネー郊外に十分な広さの農地を与える。この祖父の息子、つまりプレーの父は、プネーで八百屋を営んでいた。その次男が後に尊称マハートマーを贈られたジョーティラーオ・G・プレーである。つまりプレーは、経済的にはそれなりに恵まれた条件で生まれ育った。

プレーが生まれる10年ほど前にマラーター同盟はイギリスに敗れたために、当時のプネーは進駐してきたイギリス軍の西部インドにおける拠点となっていた。そのため、街のあちこちにイギリスの影響が及んでいた。

少年プレーは、そうしたプネーにあったイギリスのキリスト教宣教団体が運営する自由な雰囲気のある学校に通い、キリスト教や諸宗教、そして近代的科学について多くを学んだ。この学校でその教師や、アメリカ独立を促した思想家トーマス・ペインの著作などから影響を強く受け、プレーはイギリス支配に対する疑問やキリスト教に対する疑いを強く持つようになった。プレーは21歳になった1848年に、この学校を卒業する。

この48年は、青年プレーの思想や行動にとって大きな転機の年であった。この年プレーは、バラモンの友人の結婚式の行列に参加していた時に、シュードラのマーリーがバラモンの儀式に参加していると指弾された。これ以降彼は、イギリスのインド支配の不当性よりも、ヒンドゥー教のバラモンによる支配やカースト差別に対して、より積極的に立ち向かうようになる。

この姿勢は、先に述べたアンベードカルに共通する点である。差別を受ける当事者としては、抽象的・一般的な政治課題よりも、身近で具体的な支配や搾取、差別などがより緊要なニーズになるのは当然だ。もっともこの結婚式の一件は、プレー自身や伝記作家によって大げさに修飾された、とオーハンロンは指摘している[O' Hanlon:p.111]

そしてこの48年の後半、プレーはアメリカの宣教団体が作った低カーストの少女のための学校を真似て[O' Hanlon:p.112]、プネーで私立の女学校をイ

図 1:インド州別地図



出典: <http://fyamap.hp.infoseek.co.jp/is-indstates.htm>

ンド人としては初めて設立する[Mahatma Committee:p.17]。この創設は、1867年の日本の明治維新やマルクスによる資本論第1巻刊行の20年前、そして1869年のマハートマー・ガンディー生誕の18年前であることを考えると、その先駆性が理解できよう。

しかしこの試みは、バラモンが支配的なヒンドゥー社会から大きな反発を受け、様々な試練に直面する。例えばこの学校の教師になる人は少なく、フレーは13歳の時に結婚した妻に教育を施して教師とした。ブネーの人々は、このフレーの妻に石を投げて怪我をさせている。それだけでは済まず、この人々はフレーの父親にも迫り、困った父親はフレーとその妻を実家から追放



した。それでもフレとその妻は、不転で活動を続けた。また活動資金を購うために、フレは英語の講師をしたり、建設・土木会社を設立して経営する。実業家としてのフレも、それなりの実績を残している。

その後紆余曲折はあるものの、フレはプネーで少女や低カーストの子供のための学校や、労働者のための夜間学校をいくつも創設する。ヒンドゥー社会からは非難されたこうした活動は、対照的に英領インド政府によって高く評価され、1852年にボンベイの教育局から表彰を受けている。さらにフレは、不合理なヒンドゥー社会からの女性の解放を目的に、寡婦再婚<sup>10</sup>を奨励したり、床屋に寡婦を剃髪するのを拒否させたり、捨て子や婚外子とその母親のための寮を設けたり、当時の不可触民に自宅の井戸を開放するなどした。農村を歩き回り、農業の技術的改善にも努力した。

また1873年には、下層カーストの人々をバラモンによる抑圧や搾取から守ろうとする彼の思想を広く伝えるために「真理探究者協会 (Satya Shodhak Samaj)」を創設し、90年に亡くなるまでこの「真理探究」の活動を続けた。この協会は少しずつ支部が増え、雑多なカーストの人々がこの会員となっていった。換言すると日本では明治6年という早い時期に、低カースト出身の人が今日でいうNGOを設立し、その後それを継続的に発展させたのである。さらに1876年から82年にかけては、プネー市議会の議員を務めている。

こうした彼の功績は次第に広く認められるようになり、1888年にはボンベイの集会で「マハートマー(偉大な魂)」の称号を贈られている。そして1890年に亡くなる直前まで、著作活動を続けた。

今日的にフレを表現するなら、宗教的に正当化された社会矛盾に勇敢に立ち向かい、またそれゆえに生じた多くの反動的な反応に正面から直面した当事者であり、NGO活動家であり、人権活動家であり、さらに最も先駆的なジェンダー論者ということになろう。先にも述べたように、マーリー・カーストの人々は一般に労苦を厭わず懸命に働く人で、かつ先進的であったことが、フレを生み出した大きな要因と言えよう。

### 3. ビハール州ガヤー県のマーリーとその暮らし

冒頭に述べたように、インドで最貧のビハール州におけるマーリーの人々

は州人口の1%にも満たない全くの少数派である。そのせいもあってか、マハーラーシュトラ州のマーリーとは、主に以下の点が異なっている。

- 1) 自分たちが本来はクシャトリアであると（少なくとも強くは）主張していない。
- 2) マハーラーシュトラ州のマーリーにはサブカーストが10程あるが、ビハール州には研究者によると三つ<sup>11</sup>、現地での当事者の話によると差違の少ない二つしかない。
- 3) マハーラーシュトラ州のマーリーは花卉だけでなく野菜の生産や流通にも関わっていたが、ビハール州では花卉の生産と販売に特化しているものが大半である。
- 4) フレーという苗字は使わない。マーラーカールが大半で、他にバガート、ヴァルマー、スマン、マドゥカルなど。

本章は、ビハール州ガヤー県の仏教聖地ブッダガヤーで花売りをしている一家と、ガヤー市内で花屋を開業している一家のインタビューから、マーリーの人々の生活を描くことを試みた。

### 3-1. ブッダガヤーの大菩提寺の門前の花売り一家

今から約2600年前、苦行を止めた35歳のゴータマ・シッダールタが、ブッダガヤーの菩提樹の下に静かに座って悟りを開き、ブッダ（サンスクリット語で「真理に目覚めた者」）になった。現在その場所には、大菩提寺（Maha Bodhi Temple）があり、チベットやタイ、スリランカなど世界各地からの巡礼者たちが訪れる聖地になっている。

その大菩提寺の門前の道端で、巡礼者たちにお供えの花を売っている少年と知合い、その兄と父から以下のような話を聞いた<sup>12</sup>。



写真1:ブッダガヤーの大菩提寺前の花売り

## 1) 家族の構成員とその仕事と教育

このバッチュ・マーラーカールを家長とする16人家族の一家は、下の表-1にあるように、息子6人中5人が花卉の栽培と販売に従事し、一家の生計を立てている。正確には、長男は寺院からの注文を受けて花を供給し、二男は花卉栽培と結婚式の花の飾りつけ、三、四、五男が大菩提寺の門前の路上で、警官に気を使いながら花を売っている。

一見すると伝統的職業に就くマーラー一家だが、15年前に村からブッダガヤーに出てくるまで、父親のバッチュ・マーラーカールは列車に乗り込んでスナックの行商をして生計を立てていた。さらに数か月前まで、バッチュはブッダガヤーの路上で野菜を売っていた。その意味では、彼の子供の代になって伝統的職業に戻ったといえる。

ちなみにバッチュは、数ヶ月前に野菜の路上販売を警察官に咎められたことをきっかけに仕事を止めてしまい、インタビューの時点では無職であった。その欠損を補うために、また冬の間はチベット仏教徒をはじめとした外国人巡礼者の数が大変に多いので、息子たちは花売りに力を入れていた。さらには自宅建設の銀行ローンの返済を迫られている、という事情もあるようだ。

この一家の教育水準は、この章の後半に示したガヤー市内の花屋のマーリー一家と比べて明らかに劣っている。特に20歳以上の女性の教育に、遅れが目立つ。その意味で、長女の今後の教育が注目される。

ちなみに女性メンバーは、誰も生産や販売の仕事に関わらず、家事や育児に専念している。教育程度が低いとはいえ彼女たちが仕事に関われば、もっと売り上げが上がるように思うのだが、文化的な障害があるのであろう。

表-1:バッチュ・マーラーカール一家のメンバー、仕事、教育

立場	名前	歳 <sup>13</sup>	仕事	教育
父	バッチュ・マーラーカール	50	無職（元野菜売り）	読み書き少し出来る
母	デーマンティー・デービー	45	主婦	読み書き出来ない
長男	パーワン・マーラーカール	27	外国寺院に花供給	四年生まで
次男	パンナー・マーラーカール	25	花卉栽培、花飾り	三年生まで
三男	バジランギー・マーラーカール	23	大菩提寺前花売り	10年生まで
四男	ヴィクラム・マーラーカール	20	大菩提寺前花売り	6年生在学中だが、10年生試験受験中
五男	ビーム・マーラーカール	18	寮生活なので仕事せず	10年生在学中
長女	プリヤンカ・クマリー	16	仕事せず	10年生試験浪人中
六男	ラフル・マーラーカール	14	大菩提寺前花売り	7年生在学中
長男妻	スシュマ・デービー	25	主婦、四人の娘あり	4年生まで
二男妻	カンチャン・デービー	20	主婦、娘一人、息子一人いたが死亡	2～3年生まで

## 2) 花卉栽培と販売用の花について:

畑地は家の近くで、20カッター(約3千平米)を、5年間4万ルピー(約8万円)

の定額地代で借りている<sup>14</sup>。花卉栽培は、二男のパンナーが担当。冬に多い  
橙色のマリーゴールド(Marry Gold、現地名:ゲェンダー)→1~2月収穫する  
白いチェリーホワイト(Cherry white flower、現地名:チェーリー、春菊の一種  
と推定される)と赤いジャーフリーレッド(Jaffary red color、現地名:ジャーフ  
リー、マリーゴールドの垂種と推定される)→赤色のバラ(現地名:グラープ)  
の順で、通年で栽培しており、他の作物は作らない。父親が栽培技術を持っ  
てなかったため、この二男は西ベンガル州の花弁農場に働きに行き、見よ  
う見まねで花卉栽培の様々な技術を覚えてきた。

肥料は少ないほうが、しっかりしたものが出来る。しかし、農薬は必須。  
灌漑用の揚水ポンプを持っているが、水源がないので他人から水を購入して  
いる。ここで栽培した花の80%は自分たちで売り、残りの20%は、ガヤー市  
から買いに来るマーリーのの人に売っている。



写真2:マリーゴールド



写真3:チェリーホワイト

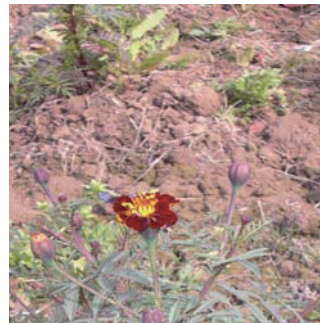


写真4:ジャーフリーレッド

### 3) ブッダガヤーの大菩提寺門前の花売りの状況

主に巡礼に来る外国人仏教徒に販売している。主な買い手は、7月から10  
月はスリランカ人、9月から1月はタイ人、12月から2月はチベット人が多い。  
親を亡くしたためにここに巡礼に来るヒンドゥー教徒のインド人は、ほとん  
ど買わない。

外国巡礼客がいなくなる3月から6月には花が売れず、生活困難な時期と  
なる。その間の4~5月は地元のインド人の結婚式が多くあり、その花飾りの  
仕事があるが、賃仕事なので収入はあまりよくない。

なおインタビュー時点で、同じ門前で花を売っているのは19家族であり、内訳は、マーリーが6、旧不可触民のチャマルが7、同じく旧不可触民のドームが2、マーリーと同じOBCのカハールが1、イスラーム教徒が2、バラモンが1とのことであった。激しい競争が覗い知れる。

#### 4) 出身の村とブッダガヤーに来たことについて

バッチュの元の村は、ガヤー県ワジールガンジ郡にあり、約7千世帯が暮らす大きな村。このうちマーリーは、30世帯ほどである。この村に25カッター(約7500平米)の農地があり<sup>15</sup>、現在はバッチュの弟が小作して穀物を作っている。しかしこの村では儲けの機会が少なく、教育の機会も少なかったため、今から15年前にブッダガヤーに移住し、花売りを始めた。

ちなみにブッダガヤーには、同じマーリーの世帯が自分を含めて18世帯ある。このうち一軒は開業医でヴァルマーと名乗っている。他はみなマーラーカールやバガートという苗字で、花卉栽培や販売で生計を立てている。

### 3-2. ガヤー市内の花屋のマーリーとその暮らし

ガヤー県の県都ガヤー市は、首都デリーから東に1000キロ、マザーテレサで有名なコルカタから西に500キロのところに位置し、人口40万人ほど<sup>16</sup>、仏教聖地のブッダガヤーや親供養のビシュヌ・パットというヒンドゥー教の寺があるという以外に、あまり特徴のない中堅都市である。この街の一角に、花や結婚式の際に使う様々な装飾品を扱う店が数軒、軒を連ねている。これらの花屋では、数人の男たちがお供えに使う花輪や贈答用の花のセットを作ったり並べたりしている。ここでも、女性の姿は見当たらない。

このうちの一軒、モーハン花店に昨2009年のコイリー調査の時に立ち寄って、店主モーハンに翌年来てインタビューするのでよろしくと言い置いておいた。ところがこの調査で来てみると、2か月前55歳のときに心臓マヒで急死したとのことであった。そのため、同じ店(正確には)をやっている長男のラビ・マドゥカルやその弟たちなどから話を聞いた<sup>17</sup>。



写真5:インタビューしたモーハン花店の店頭の様子

### 1) 家族の構成員とその仕事と教育

この一家は10人家族で、結婚式用の装飾品店と一軒離れた所の花屋を経営している。ブッダガヤーとの商売上の違いは、仏教巡礼客に依存していないので、一年中安定した売り上げがあること、そして結婚式、ヒンドゥー教の様々な祭式、選挙、有力者来訪等の機会にたくさん売れることだ。

またこの表-2の家族リストで一目瞭然なのは、モーハンを含めた家族全員の学歴が、大変高いことだ。表-1のバッチュ・マーラーカール一家と比べて学歴が格段に高いだけでなく、女性の教育程度も相当高いことが特徴だ。バッチュ一家と同様に、女性たちは店の仕事には全く関わっていない。

この一家は田畑を持たず、花卉や装飾品の商いで生計を立てている。2男は結婚式などの祭式のために、花を装飾する技術を持っている。彼はその技術を父親から学んだ。つまり伝統的な仕事をするマーリーと言えよう。

なお父と子供たちの苗字が異なるのは、長男によるとマドゥカルと名乗ったほうがマーラーカールより偉い感じがするからとのことであった。名前を時々変えたり、複数の名前を持つ人は、ガヤー県の低カーストでしばしばみられる。差別から逃れたり、存在をアピールしたり、逆に様々な政府が

提供する特権を享受するための、家族あるいは個人レベルの対応策である。

表-2:故モーハン・ラール・マーラーカール一家のメンバー、仕事、教育

立場	名前	歳 <sup>18</sup>	仕事	学歴
父(故人)	モーハン・ラール・ マーラーカール	55	死去	学士二度
母	ニルマラー・デービー	50	主婦	7年生まで
長女	インドラニー・マドゥカル	34	嫁ぎ先で主婦	学士(理系)
二女	マンジュー・マドゥカル	32	嫁ぎ先で主婦	修士(理系)
長男	ラビ・マドゥカル	30	式用装飾用品屋	学士(文系)
二男	ラケーシュ・マドゥカル	28	花屋(花装飾も)	学士(文系)
三男	ビジャーイ・マドゥカル	25	デリーでエンジニア	学士(理科系)
四男	ビカーシュ・マドゥカル	23	花屋	高卒(12年)
長男妻	サビター・マドゥカル	27	主婦、娘3人	学士(文系)
2男妻	ネーハー・マドゥカル	25	主婦、息子1人	学士(就学中)

### 2) この近隣及びガヤー県のマーリーーについて

このラヘーリヤー地区にはマーリーーの15世帯が暮らし、13の花関係の店がある。店を持たない世帯のうち、一世帯は勤め人、もう一つの世帯は後を跡ぐ子供がいない。この15世帯のうち、本人たちの親戚は四世帯である。こうした同業種の店が集まるのは営業上不利に見えるが、互いに助け合っているであろう。

ガヤー県内には、500~1000世帯のマーリーーがいる。このうち80%は農村に住み、花卉生産や流通の仕事に従事している。特にガヤー県の北、かつて三蔵法師が訪ねた仏教の学問所があった名高いナーランダー県に多い。これらの農家は、花卉中心で野菜や穀物の生産は自家消費程度が多い。残りの20%は、マーリーーの伝統的な仕事以外の仕事をしていると推定している。

### 3) マーリーーというカーストの位置とその著名人

この花屋の人たちは、自分たちを前回取り扱ったコイリー・カーストとは



近親、と認識している。マハーラーシュトラなど他の州では、マーリーが野菜生産をしているので野菜カーストと一体の場合が多いという事が、こうした認識の背景にある。またOBCのなかでは、高い立場であるとも認識している。その根拠は、他のOBCカーストの人が入っていけない宗教上の神聖な場所にも、出入りできるからだ。バラモンも、マーリーから水を受け取る。

マハートマー・フレーについては、名前を知っている程度。もっとも父は良く本で勉強していた。現在のマーリーの著名人は、ラジャスターン州の州首相のアショーク・ゲーハロートだ。マハーラーシュトラ州の州副首相チャガン・ブジヴァルもマーリーだが、マーリーだけでなく農業カーストのクンビーの集会にも顔を出している。

#### 4) 仕入先と扱っている花

ガヤー市内には花卉の卸売市場はなく、この一角がその役割も果たしている。ここの花の多くは、500キロ東のコルカタ市から仕入れる。コルカタ市の大きなハウラー橋を渡ったところに大きな花卉の卸売市場があり、そこでビハール、特にバラチャティ郡のヤーダブ・カーストの人たちが多数働いている。しかしそこに花卉を納入するのは、マーリーではなく、オリッサ州の人が多い。

ちなみにコルカタのある西ベンガル州のマーリーの多くはビジネスマンか勤め人が多く、花に関わる人は少数になっている。

この店で扱う花は、多い順に以下の通り。

- 1) マリーゴールド:黄色とオレンジの二色。前者は長持ちせず値段が高い。  
年中ある
- 2) チェリーホワイト (Cherry White flower) とジャーフリーレッド (Jaffary (red colour, 1・2月の二ヶ月間のみ)。店頭では、この二種を合わせた花輪が作られていた
- 3) ラジャニーガンダー (Rajanii Gandaa)<sup>19</sup>:西ベンガル州で主に生産。ビハールでも少し生産。年中ある。
- 4) クンド・カー・フル:ビハール州で主に生産。年中ある。
- 5) バラ:赤色が多い。年中。ベンガル産は匂い少なく、地元産のほうが匂い

がよい。

#### 4. まとめ

多くの宗教やその儀式に、花は必須の存在だ。花は人間が作り出せない美を凝縮させて表しているがゆえに、神への捧げものとなるのであろう。

花の色や形、そして開花時期や量などは、人間がある程度コントロールできる。インドではこのコントロールのために専門の人たちが必要とされ、それが次第にマーリーというカーストになった、と解釈できないだろうか。もっとも花卉だけを専門に扱っているのは、現代ではビハール州のマーリーだけで、大半のマーリーは恐らく伝統的に園芸を専門にし、その一部で花卉を扱ってきた可能性が高い。

本論の前半では、進取の精神に富み、勤勉なマーリー・カーストの人たちだからこそ、インド社会の変革に大きな役割を果たしたリーダーを輩出したことを示した。また後半では、前半と比較において、同じマーリー・カーストでも州あるいは地域によって大きな違いがあることと、僅か二世帯ではあるが、ビハール州のマーリーの暮らしと意識のありようを描いた。しかし時間の制約から、農村部で花卉生産に専念するマーリー農家を訪ねることができなかったことや、コイリーなどの近接カーストの人たちがマーリーをどう見ているかは、よく調査できなかったことは悔やまれる。

この小論を通じて、不可思議、あるいは不合理に見えるインド社会の一片が明らかになれば幸いだ。

なお次回の「南アジアの園芸に関わる諸カースト巡り」だが、油絞りのテーリー、畜産のヤダーブ、筆者がこれまで40年近く関わってきた、ビハール州の農村の周辺で農業や雑業で暮らす極貧のブイヤーンの人々などを扱っていきたいと考えている。

#### 参考文献:

-山崎元一、ある村のカーストとヴァルナ、辛島昇監修、「南アジアを知る事典」(初版)所収、平凡社、1992

- Enthoven, R.E., The Tribes and Castes of Bombay (volume II in 3 volumes), Asian Education Service, 1990, New Delhi & Madras
- Mahato, S.N. , The Mali, in “People of India Bihar” (Sinhg, K.S. -General Editor), Anthropological Survey of India/Seagull Books, 2008, Calcutta
- Mahatoma Committee (Mahatoma Phule Source Material Publication Committee), Collected Works of Mahatma Phule Vol.3 Cultivator’s Whipcord, Government of Maharashtra, 2002, Mumbai
- O’hanlon, Rosalind, Caste, Conflict and Ideology: Mahatma Jotirao Phule and Low caste protest in nineteenth-century western India, Cambridge University Press, 1985, Cambridge
- Sinhg, K.S., India’s Communities (People of India National Series Volume V), Anthropological Survey of India/OXFORD University Press, 1998, New Delhi

**参考HP:**

- Joshua Project, <http://www.joshuaproject.net/peopctry.php?rop3=114473&rog3=IN>, 2010年1月12日

**[注]**

- 1 エンソーヴェン (Enthoven,1920:p.422) によると、マハーラーシュトラ州辺りではヒन्दゥー教のジャーティーであるパンチカラシー (Panchkalshi), アグリー (Agri), ダンダーリー (Bhandari), カーチー (Kachi),そしてイスラーム教徒のジャーティーであるバグバーン (Bagbans)もマーリーと呼ばれている。
- 2 カーストは近年の国勢調査 (Census) では調査されないのので、正確なカースト人口数は不明。キリスト教布教を目的としたと思われるJoshua ProjectのHPにある推計によると、その出典や調査年は不明だが、マーリーが多いのは中西部のマハーラーシュトラ州で約270万人、続いて西部のラジャスターン州に約180万人、中部マッディヤ・プラデーシュ州に約80万人。ビハール州には僅か40万人である。<http://www.joshuaproject.net/peopctry.php?rop3=114473&rog3=IN>
- 3 カースト分布は、独立後に形成され、再編が繰り返された州によって必ずしも異なるものではないが、多くの人類学研究書が州別に記述しているので、本論でも

州別に記述する。

- 4 かつては触るとけがれるという事で不可触民と呼ばれてきた。マハートマー・ガンディーによってハリジャン（神の子）と名付けられ、インド憲法には指定カースト(Scheduled Castes)と記され、多くの当事者がダリト(Dalit、被抑圧者)と呼んでいる。指定カーストや指定民族(Scheduled Tribes)は、憲法にある留保制度によって高等教育、公的雇用、議席などにおいて一定の枠が優先的に割り当てられている。
- 5 2009年11月8日夜、インド・マハーラーシュトラ州ブネー市の氏の事務所にてインタビュー。
- 6 OBC(Other Backward Classes=その他の後進諸階級)は、指定カーストや指定民族に準ずる扱いを受けるシュードラに属する諸カースト(ジャーティー)や、他宗教の信者だが社会経済的に遅れた状態であるコミュニティのことを指す。
- 7 2009年11月8日朝、インド・マハーラーシュトラ州ブネー市の筆者滞在のゲストハウスにてインタビュー。
- 8 Bhimrao Ramji Ambedkar=ビームラオー・ラームジー・アンベードカル
- 9 Jyotirao Govind Phule=ジョーティラーオ・ゴーヴィンド・フレ
- 10 ヒンドゥー教の伝統では、女性は夫の死後も貞節であることが求められ、再婚は原則として禁止されていた。寡婦となって以降は、装身具をすべて外し、白いサリーなど質素な服を身につけて日蔭者として惨めな生活を送ることが求められていた。フレもそうであるように当時は幼児婚が一般的だったので、幼児時代に夫が亡くなった場合、女兒が一生こうした生活を強いられることがあった。
- 11 マホトやシンによると、ビハールのマーリーのサブカーストは三つ[Mahoto:p.663][Singh:p.2125]。その一つのトゥルク・マーリーはササラーム県やジャールカンド州に多いが、マハーラーシュトラ州のバードワニー・マーリーと同様にイスラム教徒なので、当事者たちは同じジャーティーとは意識していない。つまり多数のカナウジャー・マーリー(トゥルシー・マーリーとも呼ぶ)と少数のカルフリヤー・マーリーの二つのみで、しかも両者は同じ仕事をし、かつ現在では通婚関係にある。またこの二つの意識も、現在では薄れつつある。
- 12 ブッダガヤーの花弁栽培と寺院前の花売りのパンナー・マラーカール(10年1月6日)、その父のバッチュ・マラーカール(10年1月28日)に、自宅で話を聞いた。

た。

- 13 全ての年齢は、前後関係から推定したもの。
- 14 定額地代の借地契約はティーカー (Tiikaa = 印) と呼ばれている
- 15 父親のバッチュは、土地なしだったと主張した。ブッダガヤーでは外国人客の前では貧しさをアピールする傾向が強いので、父親はそれに倣った、あるいは他人に対して用心深く振舞ったのかもしれない。
- 16 このガヤー市の人口推定は、1991年Censusの294,427人 (<http://qanda.encyclopedia.com/question/population-gaya-126564.html>)。それをもとに、最近のインドの都市人口の成長率2.4%を乗じたものを10年分乗じたものである。
- 17 ガヤー市内の花屋ラビ・マドカル兄弟へのインタビューは、2010年1月27日にその店頭で行った
- 18 全ての年齢は、本人たちが推定したもの。
- 19 バングラデシュでは夜になると強い香りを出す同名の花があるが、それはラートラーニー (夜の王女) という別種とのことであった。